

## 高知フィールドワーク（2015年10月4日～5日）レポート

社会人学び直し大学院プログラムのカリキュラムにおいて、現地を訪れることができる「フィールドワーク」は、受講生の皆さんも当初から楽しみにして下さっていました。開講式では顔を合わせたものの、欠席者もいたので、教員も含めて受講生同士が交流を深める機会にもなりました。

北芝フィールドワークに続き、2015年10月4日（日）～5日の1泊2日で行われた高知フィールドワーク。前日が土曜日ということもあり、前泊して高知市内のプチ観光を楽しんだ受講生もいたようです。受講生9名、教職員8名の計17名が参加しました。今回はこの「高知フィールドワーク」での様子をレポートします。

高知駅に集合し、バスにて10時半に出発。幸い天気にも恵まれ、車窓からは秋めく山々や風いだ海、仁淀川や四万十川流域の高知らしい美しい風景が楽しめました。途中、「道の駅あぐり窪川」で小腹を満たすなどしながら、12時半「道の駅四万十とおわ」に到着。最初のスケジュールは、四万十川を眼下にみながら秋の味覚満載の「とおわか御膳」の昼食と自由時間。これからの沢山の出会いへの期待が高まります！



まず「株式会社十和おかみさん市」の代表取締役の居長原信子氏より、会社運営の現状、おもてなしツアー、おもてなしバイキング、産直販売等についてお話を伺いました。

旧十和村を中心に集落単位を基本に組織された加工グループと生産グループなどで構成された、地元の女性中心の会社です。「打って出る」発想での加工品づくりと販売、交流事業での実績が評価され、2005年第44回農林水産祭のむらづくり部門で内閣総理大臣賞を受賞しています。



道の駅でのおもてなしバイキングは、地元の味がたっぷり楽しめると大人気となっています。



続いて、「柵四万十ドラマ」代表取締役の畦地履正氏は、「地方はジブンで考えろ」の立場で環境に負担を掛けない好循環の地域戦略、今後の展開として栗の剪定技術向上による付加価値づくりと第1次産業の振興、加工工場の設置や商品開発の夢を、情熱的に語られました。

ついでに寄るといふ立地ではないだけに、目指して来てもらうための魅力ある商品開発、イベントなどを積極的に行い、全国にファンを拡大しながら果敢に攻めておられます。

場所を移動し、同じ十和の昭和地区にある「あったかふれあいセンター風らっとおわ」にて、しまんと町社会福祉協議会の長谷部恵美事務局長より、社協の目指す地域福祉やあったかふれあいセンター事業などの取り組みをお話いただきました。



この5月に開所したまだ新しいあったかですが、昭和地区中心部の保健センターにあるため高齢者だけではなく母子の利用が多く、利用日には元気な子どもの声が響いています。

その夜は、宿泊をさせていただいた旧古城小学校「ドミトリー546」の食堂にて、地域の住民の皆さんや四万十町で講師をして下さった皆さんとの交流会。食事は「柵十和おかみさん市」のメンバーでもある古城婦人部のお二人が腕によりをかけて丹念に準備し、作って下さった、絶品の「皿鉢（さわち）料理」。盛りだくさんの数えきれないほどの地料理に、贅沢にも旬のつがにや猪汁などが加わり、山の恵み川の恵みをお腹がはち切れるほど満喫させていただきました。



何よりも、NPO せんだんの樹の皆さんやインターン生、講師陣の皆さんと受講生、教職員との話がそここで弾み、食堂は遅くまで笑い声で包まれました。勿論、様々な課題を聞き取り話し合う場にもなったようで、それぞれに考えを深めたようです。

高知フィールドワーク 2 日目。清々しい山の空気を堪能し、鳥の声で目覚めます。朝食でも、古城婦人部の皆さん自慢の優しい旨味にあふれた味噌を使った味噌汁や漬物が大人気。おかわりも続出でした。

「(社)いなかパイプ代表理事」の佐々倉玲於氏のお話を聞きに、旧広井小学校を訪ねました。



ここはシェア

オフィスやカフェとしても活用されています。「田舎」で仕事をし、暮らしていきたいと考える若者たちを対象に、いなかビジネス体験、インターン、事業化・起業支援等、人材育成の取り組みなどをされています。田舎と都会をつなぐ「パイプ」であり、全国の思いのある人たちをつなげる「パイプ」でありたいと、ウェブを活用した発信も日々しています。「いなかビジネスマネージャー育成」は、本学の教育とも接点を持てる可能性を期待させるものがありました。

四万十町に別れを告げて、一路中土佐町へ。昼食は久礼地区にある大人気の「大正町市場」。もともと、住民が明治初期から海産物などを持ち寄り物々交換からはじまった市場だと言われています。その「地蔵町市場」を含む 250 戸が大正 4 年の大火事で焼失、大正天皇が参百五拾円を復興費として御送り下さったことから、この名になりました。薫焼きの分厚い鰹のたたきやうつぼの湯引き、なぶらスープカレーなど、漁師町ならではの新鮮な海の恵みに舌鼓を打ちました。



「大正町

市場」の傍にある2階建ての民家が本学のサテライト「地域福祉研究所」。ここで「企画・ど礼もん企業組合」理事の川島昭代司氏から、「鯉乃國万（よろず）談義」と題して、中土佐町の紹介、大正町市場の過去・現在・未来や企業組合の商品開発秘話や食堂経営など、分かりやすくユーモアあふれたプレゼンをしていただきました。



川島氏は、自らもスナックを経営されて中土佐町商工会長でもあり、イラストレーター・デザイナーとしてもマルチなタレントを発揮されています。久礼八幡宮や防災避難タワーも見ることが出来ました。

旧道沿いの山の緑と四万十川源流につながる風景を楽しみながら、最後の訪問地の津野町床鍋地区にある農村交流施設「森の巣箱」に向かいました。



大崎登施設長からは、「廃校舎・森の巣箱の未来への挑戦」についてお話しいただきました。地域支援企画員や町が協力し少しずつ地区住民の思いを形にしたプロセスは、2007年「全国過疎自立活性化優良事例総務大臣表彰」を受賞しています。合意形成を意識しながら森の巣箱を拠点として、宿泊交流事業、イベント実施、集落コンビニ経営、ししとうのパック詰め作業、お守りカードの作成などに取り組み、機能を高めつつ小さな集落の営みを継続するために全員一致で取り組んでいます。住民自らが集落福祉を自己実現しようと模索しながら進む確かな歩みは、ゞに相応しいものでした。

高知での2日間は大変タイトなスケジュールでしたが、私たちが目指すべきモデルともなる現場に自生する力強い「福祉開発マネジャー」たちや、魅力的な住民の方たちに出会い、様々な示唆を得た豊かな時間となりました。それぞれに耳を傾け語り合い心を感じたであろう「大人の修学旅行」での経験は、きっと参加者の視野を大きく広げてくれたことでしょう。